



イネばか苗病の発生と防除対策

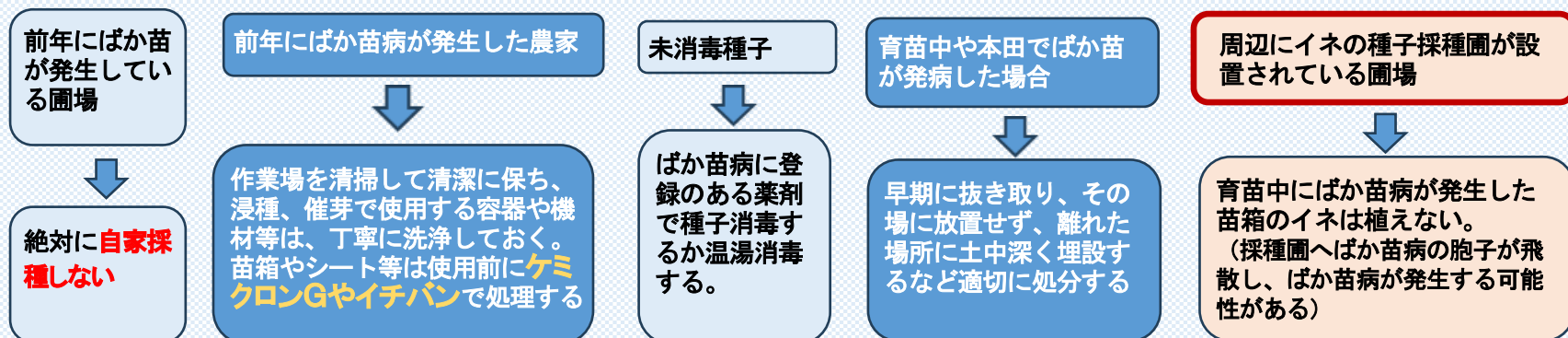
イネばか苗病は、主に**種子で伝染**します。購入した種子（飼料米、多収性専用品種など）であっても**種子消毒剤の処理がされているかを必ず確認し、処理されていない種子**については、下記を参考に必ず**種子消毒を徹底**してください。

イネばか苗病の主な生態

- 1) 主な伝染方法は、**種子伝染**です。前年にイネばか苗病菌に汚染した粃を種子に用いると、種子伝染します。また、高温、多湿、厚播きの場合発生が多くなります。
- 2) 育苗期では、第2葉期以降に症状が現れ、葉や葉鞘が伸びて徒長し、色が淡くなります。
- 3) 本田に移植後も、葉鞘や節間が徒長して黄化し、やがて枯死します。この枯死に至る過程で、株元などに多量の病原菌胞子を形成し、これが伝染源となります。
- 4) 病原菌は風などで飛散して、開花期の穂に付着し、粃に伝染します。



防 除 対 策



種 子 消 毒 の 方 法

水稻種子は毎年更新しましょう



1) JA等から購入する薬剤吹付種子の場合は、→ そのまま浸種作業に入ります

既に**種子殺菌剤**（対象病害：ばか苗病、いもち病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病）と**殺虫剤**（対象害虫：イネシガラセンチュウ）が**吹付け処理されていますので、そのまま浸種作業に入ります。**

2) 未消毒種子の場合は、→ 種子消毒を行い、浸種や催芽に入ります

塩水選（うるち品種は比重 1.13）で粃を選別し、次のいずれかで種子消毒を行い、浸種や催芽に入ります。

- (1) **化学農薬**（モミガードC-DF[F:3と12とM01]またはテクリードCフロアブル[F:3とM01]などとスミチオン乳剤[I:1B]）の規定量液の中で種粃（袋）を浸漬してよくゆすり、薬液が袋の中心部までいき渡るようにします。このため、種粃袋に種子を詰めすぎないようにし、**種粃 1 kg 当たり薬液 2 ℓ 位を目安**にします。長時間浸漬では、処理中に1～2回攪拌します。防除効果を安定させるため、水温は10～15℃に保ち、処理後は水洗せず、浸種作業に入ります。

注）FはFRAC、IはIRACコードを記載しました（コードが複数は混合剤）。

- (2) **温湯消毒**：**「うるち品種」**は、種子を60℃に保った温湯に10分間浸漬処理し、処理後は多量の水中で速やかに冷却します。なお、割れ粃が多い場合は、温湯消毒により発芽率が低下する危険性がありますので、避けてください。

- (3) **生物農薬**：**（エコホープDJ、タフブロックなど）**は、使用方法、使用時期などで適用病害が異なる場合があります。使用方法、注意点などを十分確認して、適切に処理します。

※ **なお、温湯消毒や微生物農薬での種子消毒は、それぞれの単独処理では効果が劣る場合があるため、これらを組み合わせた処理で効果を安定させます。**

記載農薬の登録は、令和7年2月27日現在です。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 News は J A 全農いばらきホームページでもご覧になれます。